

句集

椰の木



Nagi no Ki
Ogawara Kiyoe

小河原清江

椰の葉を

懐紙に添へて

女正月

これは小河原家の敷地内
にあった大きな椰の木を
詠んだものである。

草木を吹き分けるほどの
強い風の中、ひるむことも
なく、倒れることなく生
え続けた椰の木は小河原
さんにとって慈悲深い守
り神なのである。

能村研三

元朝や屋敷稲荷へ灯をともす

葉牡丹の芯に蓄めをり陽のかけら

風揚がる海に展ける安房の山

初蝶や亡き人と逢ふ夢の中

花鳥の歌より高し反戦歌

蝮草齡重ねてより親し

墓守の貌して蠟螂現るる

鏡屋の漆黒の間へ律の風

外つ国へ発つ子を送る実南天

陽を吸ひし楨芯に火をかかぐ

春潮へ路曲がりゆく漁師町

受験終へ少年少女明日へ羽化

木曾谷は竹の秋なり風の湧く

鯉幟五能線に沿ひ二三ヶ所

チエ口を聴く花^か音^{のん}てふ薔薇香る朝

明易し子がまたひとり外つ国へ

日本海望める墓地や白木槿

実柘榴や甲斐も信濃も戦の地

林檎剥く昔のやうに子ら集ひ

秋澄みてプラハは塔と坂の街

菩提樹の黄葉降りやまず王家の悲

菩提樹のおぼろな家系雪花舞ふ

春寒やモルダウにひとつ残置灯

春宵や身の内熱きカンツオーネ

サマータイム旅のはじめの白夜かな

窯を継ぐ陶工二代男郎花

対岸の子へ秋灯の滲みをり

海荒るる無月の浜のくらからず

もののふの魂明りとも烏瓜

小鳥来て猫の金の眼光りだす

冬渚波引くときに波の音

疎開の夜母と聴きたる櫓の鈴

かぢめてふ荒布根こそぎ冬の浜

冬たんぽぽ日輪大地へ鏝めて

春一番沖ゆくタンカー南へ

春怒濤サーファーやがて魚影めく

黒潮の香やぞくぞくと芥子咲けり

遠山へ巨き入日の植田かな

桐の花
花火師
栖むて
ふ峡の
村

海桐咲く
帰港の
船の水
脈長し

草々に
草の色
して子
蠟螂

雨の田
の光は
地より
曼珠沙
華

菊日和父祖の墓石の温かし

秋惜しむ左千夫遺愛の吊香炉

水引草少しの風に少し揺れ

鷹渡る遠流の公きみの岬かな

寒満月海にくだけて揺れやまず

仏間より一い擲てき年の豆を撒く

春隣埴輪遠くを見てをりぬ

大都会ビルが切り取る春の空

著者略歴

小河原清江（おがわら・きよえ）

昭和十五年七月十二日 千葉県に生まれる

昭和六十二年「風濤」入会、原子女平主宰に師事

平成元年「風濤」同人

平成二十二年「沖」入会、能村研三主宰に師事

平成二十五年「沖」同人



編集
柳の木

発行 令和二年七月十二日

著者 小河原清江

発行者 姜琪東

発行所 株式会社 文學の森

〒一六九・〇七五

東京都新宿区高田馬場二・一・二田島ビル八

tel 03-5292-9188 fax 03-5292-9199

e-mail mori@bungak.com

ホームページ <http://www.bungak.com>

印刷・製本 有限会社青雲印刷

©Ogawara Kiyoe 2020. Printed in Japan

ISBN978-4-86438-873-3 C0092

庶丁・乱下木はお取替えいたしません。